

市川崑監督

「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」のロケ撮影で泊まっていた京都のホテルの部屋がノックされ、ドアの向こうに立っていたのはタバコをくわえた有名な監督だった。前触れ

私の履歴書

子 恵 岸

(21)

もない訪れに私は慌てた。「はじめです。市川崑です」。脚本を持っていた。「五所平之助監督の『たけくらべ』のあなたは素晴らしい。おいらんになり切っていた。ぜひ一度仕事をしたいと思っていました」監督が差し出したのは映画

「おとうと」の脚本だった。「げんという姉妹を演じられるのはあなたしかいない」

こうして市川監督と女優としての私の長くて心にしみる道行が始まる。初めのうちはチクハクでうまくいかなかった。「表に出ようか」と言われてセットを出た。「あなたのげんは違うんだ」。市川監督の瞳に困惑があった。「げんという娘は野暮った

「おとうと」で野暮な姉役

「口をポカンと…」一言で開眼

くて色気もなければ頭もよくない。センスなんてかけらもない。弟のためだけを考えている姉なんだ。弟思いはよく出ている。でもあなたのげんは艶やかで姿が良すぎる」私は途方に暮れた。ステーキ裏で木の切り株に腰掛けた市川監督は困り果てていた。「どうしたらいいんでしょ。げんを演じるのは私しかない」と仰いました

「たとえば、いつも口をポカンと開けていてみようか」「えっ……」この一言で私の中の何かが壊れた。縮まりなく口をポカンとあけている状態で市川監督が描きたいげんの息吹が私の息吹と重なった。体の隅々にげんの所作がにじみ出てきた。やばった！着付けも、鈍で健気なげんも。今、臆面もなく言いたい。監督のたった

「あなたしかいないんだよ。僕に見えているげんが恵子ちゃんには見えていない」私に見えていないの？どうすればいいの？ほとんど絶望的になった。

「まず、骨と皮しかないほどに痩せてくれないか」「私、ほぼその状態だと思えますけれど」監督の眼が宙に浮いて何かを思いついたようだった。

一言で私の演じたげんは完璧なものになったと。

「おとうと」はその年の映画賞の多くをかつさった。皮肉なことに結婚のためすべてを捨て去ってからの方が作品に恵まれ、女優としてもましになったと思っている。

外国送金などもってのほか。円では飛行機の切符も買えないんだよ。そんなことも知らないのか。意地悪したいなら実のあることを考えろよ」お風呂場の中で大きな声で唖唖を切った。私にはうれし



市川崑監督と（パリの自宅）

ところが世間というものは面白い。マスコミは少し前から奇想天外なことを書き始めた。岸恵子は金に困って日本に出稼ぎに来たと。「マジかよ。ホウキで掃き寄せるほどギラを積まれても、我が日の本の国は貧乏で

しかも写真付きである。それは振り袖を着た私が発明コンクールで優勝したジャガイモの皮むき器の作者に満面の笑みでトロフィーを渡している写真だった。「突飛で面白い記事だね」夫が笑った。（女優）